

調査研究委員会を代表して

沖縄県がかかえる嘉手納飛行場・普天間飛行場は、高人口密度地域に存在し、かつ航空機の昼夜を分かたぬ飛行のため、航空機騒音による生活妨害、健康影響がわが国でもっとも深刻であり、地元のマスコミによって「殺人的騒音」とも形容されている。しかしながら学術的な批判に耐える騒音曝露の実態および周辺住民の被害に関する総合的な調査研究がこれまで行われてはこなかった。嘉手納飛行場・普天間飛行場がいつまで存続するかは容易に予見できないが、いつかはそれらの存在も歴史のひとつとして過去のものとなるはずである。今の時点で専門知識をもって曝露の実態を記録し、住民への影響を検出しておかなければ、嘉手納飛行場・普天間飛行場周辺で起こっている事態が、正確な情報として後世に伝わらなくなるのは、火を見るより明らかである。それは本調査にたずさわった者たちが、過去の騒音曝露の実態と住民への影響を知ろうしたときに痛感したことでもある。

この調査結果が、所期の目的を達しているかどうかは、大方の批判に委ねなければならないが、調査項目と内容は、予算、人員、期限等の制限の中でほぼなし得るかぎりのものであった。これほど包括的な調査が1地域で行われた例は見あたらないという意味では、その調査研究に従事し得たことを研究者として幸運に思うとともに、その機会を与えられた関係者に深甚の謝意を表するものである。

騒音の研究者として嘉手納飛行場・普天間飛行場周辺で起こっている騒音曝露については、それによってもたらされる被害に思いをはせるときそこに居住する住民に対し同情の念を禁じ得ない。沖縄の米軍基地の帰趨については本調査研究委員会の関与しうるところではないが、今後関係諸機関が基地問題に適切に対処されることを切望する。そのとき客観的で正確な知見に基づいた議論がなされることを念願するものであり、その場合すぐれた学術的調査研究こそが国内外の関係者に対して現地の状況を説明し、かつは対策を要望するに際して、その説得力を向上せしめるに裨益するであろうと信ずるものである。本調査報告書が沖縄の基地問題の解決にいくばくかの貢献をなしたならば望外の幸せと言わざるを得ない。

本調査は、沖縄県環境保健部(現文化環境部)環境保全室、沖縄県公衆衛生協会、関連市町村、航空機騒音健康影響調査研究委員会が、相互に協力して実施したものである。その意味では通常の委託事業とは異なる事業の形態となった。今回の調査研究は、このような良好な協力関係が形成されたことによっではじめて実行可能となった部分が少なくない。ここに関係者に衷心より謝意を表する。

また2回にわたる質問紙調査に回答された住民の方々、聴力検査を実施するにあたって協力を惜しまれなかった県立中部病院ならびに検査に協力された方々、幼児問題行動の調査や学童の記憶調査に御協力くださった幼稚園・保育所・学校の関係者にあらためて感謝の意を表したい。

最後に本報告書を執筆した共同研究者の姓名をここにとどめて労を多としたい。平松幸三(武庫川女子大学)、宮北隆志(熊本大学)、與座朝義(沖縄県立中部病院)、松井利仁(旭川医科大学)、渡久山朝裕(沖縄キリスト教短期大学)。

また、沖縄県公衆衛生協会囑託研究員の箕浦一哉氏にはデータ解析と報告書作成において多大の助力を得た。ここに謝意を表する。

平成11年3月25日

航空機騒音健康影響調査研究委員会
会長 京都大学名誉教授 山本剛夫